



G's ART

林 央子のWhat's Art?

Illustration: the blake wright Edit: Sayuri Kobayashi

志村信裕が見据える日常と聖なるもののあらたな接続点

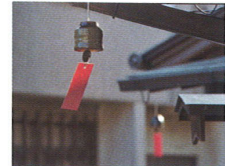


[Dress] 2012/2015年 Photo: Ken Kato

展覧会入り口で、目録をもらう。その紙に書かれていそうな難解なタイトルや、普段はそうした書類で見かけないような専門用語とは異なるタイプの言葉が、目に飛び込んできた。作品名Dress、素材名ビデオ、リボン。とびぬけてシンプルな3つの言葉が、すっと入り込んでくる。「ドレスビデオリボン」。すくない言葉から受ける印象はなぜか、強い。なぜだろう？ いくつかの展示室をぬけると、暗い部屋に入ったゆっくり目が暗さに慣れていく。あたりを見回すとそこにあるのはたしかに、リボンである。映像のスクリーンでもあるリボンは、通り抜け可能であることも理解する。あ、そうか。そんな知覚体験をしているときの、時間がとまったようなセンチション。美術館なのに「あなたはこ

れを見るのです」と強要されない。どちらからどこを見ても美しい、光と影と映像にみちているけれども「からっぽ」な感じのする部屋との出会いは、衝撃だった。からっぽの状態に置かれると、人はよりメッセージが深く入りやすくなる。アーティストの作るからっぽな部屋は、気づきの気配に満ちているのだ。

1982年生まれの志村信裕は、いくつもの芸術祭やギャラリーで展示を行ってきた。アート通の間では注目の存在である。東京生まれの、東京育ち。2年前にYCAMのある山口県山口市に引越した。制作することより「生活すること」に焦点をあてたからだという。環境の変化とともに、自然と作品も変わってきた。たとえば14年に島根県大社町の『出雲やおよろずアートプロジェクト』で発表した「土の鈴」。調査の過程で島根県出身、民藝運動における中心的人物である河井寛次郎の存在を知り、志村自身も島根の民芸にのめりこんだ。職人や住民たちと湯のみから「風鐸」を作り、



[土の鈴] 2014年 Photo: Toshihiko Takashima

「神迎の道」の各戸に掛け、神在月に神の気配を立ち上がらせた1週間を、出雲の人々とともに過ごした。

東京都現代美術館での『未見の星座』展には最新作も展示されている。「Mountains/ビデオ湯桶」。こちらが間と映像によってまさか湯桶とはわからない抽象的なイメージに転換されている。「最近見なくなった、けれどもかつては日常的に使っていた道具である湯桶。そのひとつひとつを、一人のひとの存在のように感じながら展示しました」。湯桶のサイズは、最近志村が熱中している民芸の、七寸皿の大きさでもある。

民芸の器や木製の湯桶、それは私たちの生活にかつて、とても近い存在だった。しかしもはや私たちはそうしたものには出会えない。100円ショップに、物はあふれているけれど、では私たちは歴史から断絶されてしまったのかというと、そうではない。アルカイックな日常生活の記憶、物たちの豊かな歴史、日本人の生活様式に関する記述は、今も私たちの身近にある本の中では静かに息づいていて、簡単にアクセス可能なのだ。志村は美術館のインスタレーション横にあえて「文庫本の本棚」を作り、そのことを軽やかに示した。ほんとうの美しさと豊かさは、どこにあるのかを真摯に問い、古さのなかにある新しさを、私たちの前にそっと差し出すために。

グループ展『未見の星座(コンステレーション) — つながり/発見のプラクティス』>> 開催中〜3月22日 ⑤月/東京都現代美術館/3月22日 11:00〜関連イベント「文庫カバー屋台」を開催。お気に入りの文庫本を1冊持って行くと、それに志村がブックカバーをかけてプレゼント(先着20名)。●6月にはユカ・ツルノギャラリーで個展を予定。●8月には水戸芸術館の『カフェ・イン・水戸R』に参加。美術館展示室に加え、館内の意外なところで新作を発表する予定。